

# TRAIL RUN

トレイルランニングをこよなく愛する人たちに贈るディープな情報

153回

JUNE

文/吉本 亮

## トレイル通信

特別企画③

### トレイルレース今昔物語

### 2012年

### 地図がない! 情報が無い!

### ココダチャレンジ2012

「パプアニューギニアで8月にある100kmのトレイルレース、走ってみませんか?」と、当時の編集長から切り出されたのは8年前の6月。知らない国のレースは興味深い。二つ返事で向かった現地は、経験値が数段上がるほどの意外性に満ちていました。

### 日本の中古車がいっぱい

パプアニューギニアは、オーストラリアの北、赤道寄りにある島国で、首都はポートモレスビー。コースとなるココダトラックとは、ポートモレスビーから100km近く続くトレイルのこと。ハイキングコースとしても確立されており、コースを走破するためにはガイドやポーターも必要で、その料金は当時約25万円。レースの参加費も25万円。場所柄、オーストラリアからの観光客が多いもよう。ネット上でコースを探しても地図がなく、GPSのデータを共有するサイトでそれらしきコースを入手して、ハンディGPSに入れて走ることにしました。

さて、パプアニューギニアはもとイギリス連邦の植民地でもあったため、自動車は左側通行で、日本から中古車が多く輸入されています。おかげで日本の排ガス規制や社車のステッカーが貼ってある車をよく見かけ、ビックリしたのは突然、日本語音声がかっこよかったです。「左に曲がります」との声は、横須賀市のゴミ収集車の音声でした。

### 着陸はジャングルの中

会場へは基本、飛行機とトラックで移動しますが、筆者だけ航空券がなかったため、直接会場まで小型飛行機で飛ぶことになりました。着陸地は森の中で、GPSで上空から探しても飛行場は見当たりませんでしたが、しかし、よく見ると木々の間に太いトレイルが見えてきました。着陸後、村の人たちが家から出てきて取り囲まれました。山中にはよろず屋があり、治安対策のために倉庫のような建物に窓が1つだけ開いています。窓から主人に声を掛けて、倉庫内の商品を指さして注文する方式でした。スタート近くに設置された選手村は、きちんと熱いシャワーも水洗トイレも付いたコテージとなっていて、ベッドには蚊帳が吊るされていていました。前夜にピザを食べながらのブリーフィングが行われましたが、参加者は総勢で10人ほどです。

### エイドはごぼう汁!

翌日、朝早くに会場へ行くと、現地のポーターと外国人選手が集まっていました。多くはオーストラリア人で、日本人は初参加とのこと。モチベーションも上がりません。

朝7時に、いよいよスタート。コンディションも行程も分からないためスロースタートに徹したせいか、15分もすると周りには誰もいなくなっていました。道は明瞭ですが、地図も距離表示もありません。応援もなく、たまに、物珍しさで村人が家から出てくる程度です。

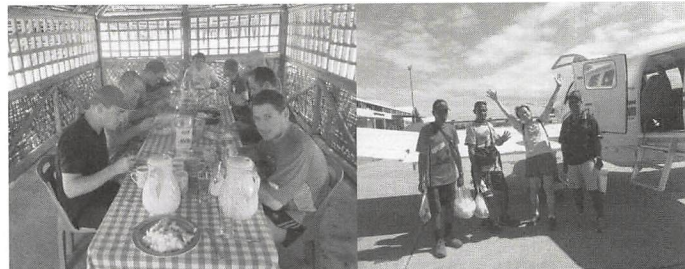
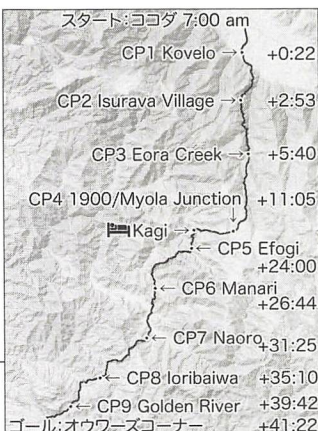
説明では数カ所にエイドがあるはずでしたが、通過が遅いために既に撤去済みで、看板だけが残っているところも。幸いにも、水は至るところから湧き出ているので、持参したあんぱんや柿ピーとともに、おなかを満たすことができました。

### スライパーの登場

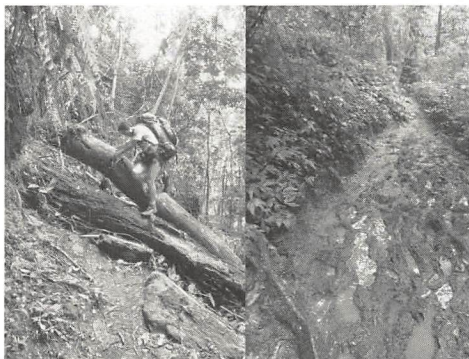
夕方に初の有人エイドに到着

### 【ココダチャレンジMEMO】

パプアニューギニアのココダチャレンジは、2005年から開かれて、筆者が出場した12年に終了。現在は、同じ大会と距離で「ココダチャレンジ」が毎年開かれているものの、クロスカントリーのチーム戦で、開催地はオーストラリアとなっている。



(右)軽飛行機で直接会場へ。乗る前に体重測定が必須。(左)外国から参加するランナーは、前日の昼には到着し、選手村で一緒に食事をとる



## 吉本 亮

よしもと・まこと

2002年に富士登山競走に出るも8合目手前で失格。同年の初マラソンは福知山で4時間。今年の皇居はブルーシートの花見客がおらず、本当の“花見ラン”となりました。

(左から)倒木も渡渉も至るところにあって、とても走れたものではない。湧き水が豊富なので、ドロドロしたトレイルが何カ所も出てくる



(右上)トレイルの起点で記念撮影。ポーターたちも年収数年分の賞金を目指してガチランする。(右下)ほぼ赤道直下で高温多湿なので、子供は裸で動き回っている。(左上)食料も通過チェックもなく、目印だけが残されたチェックポイント。(左下)見晴らしが良い場所に、大理石で作られたモニュメントが数カ所あった



(右上)軒先には戦時中に使われたであろう手榴弾が。ほかに手錠や不発弾なども並べられていた。(左)初日の夜、村の住居の1階部分で食事をいただき、横からいただいたクッキーのリキリキ。おそらく、日本語の「力力」からきている

筆者も重心移動での走りを研究す

スーブを沸かし、ビスケットをいただきます。そこから2〜3人が、交代で前後でエスコートしてくれることに。現地ポーターだけに、暗闇でも適切なルートを選んでくれて、足取りも確実に心強かったです。

バブアニューギニアのトレイルには岩場がなく、どこに行っても泥だらけで滑りまくり、アウトソールにもすぐに泥が詰まって滑ってしまおうという感じです。そんななかでも現地のポーターたちは、ビーチサンダルで危なげなく走っていきます。よく観察すると、足を置くところがわずかな凹みの底だったりして、そこに垂直に足を置けば絶対に滑りませんし、重心移動で前に進むために蹴る力も使いません。そんな走りを見てから

るようになりました。

午後8時過ぎ、疲れてきたところで次の村に到着すると、歓迎してくれた村の人たちが、「夕食を食べて泊まっていけ」とのこと。ふかし芋をもらって高床式住居の1階部分に案内されると、ほかに2人のランナーが焚き火を囲んで寝ていました。

**大きなパイソンが！**

朝4時に起きて、薄暗いなかを出発。前日に続き、スイーパーがフォローしてくれるので助かります。よく見ると、彼らは剣を持っており、長く伸びた枝や葉を切り落としながら歩いています。これならば、動物が襲ってきても安心です。

すると、5〜6人の集団で進んでいたところ、後ろで叫び声。そこに見えた、直径10cmほどの縄状のものは、長さが3mある大蛇・オリーブパイソンでした。直後にいたランナーはスネックキヤッチャーが仕事でしたので、プロらしく処理。動かないようにしてから頭を切り落とし、胴体を体に



(上から)ネイチャーランドの職員だけに、勇敢にも大蛇を引きずり出していた。42時間で終点に到着。トレッキングツアーだと約8日の日程で走破する

巻きつけて、近くの村人に、貴重なたんばく源」としてプレゼントしていました。

**大戦時の遺構も**

このトレイルは、第2次世界大戦時の激戦地だったこともあり、各所に立派な慰霊碑があります。また、軒先に手榴弾が飾ってあったり、戦闘機の予備燃料タンクが水溜に使われていたり、自然にある風景のなかに、ふと考えさせられるものがありました。事前に少しでも、歴史の本を読んでおけばよかったかなと、感じさせられました。

優勝者は18時間を切るタイムでしたが、私は42時間かけて翌々日の夜0時にゴール地点に到着。すぐに現地のホテルへ送ってもらおうと、先着のランナーは5人。泥だらけのシューズは、翌朝には洗われ、軒先に並べられていました。

トレイルレースと思って参加しましたが、実際は渡渉あり倒木ありのジャングルレース。UTMBなどに慣れている戸惑うほどの刺激的なレースでした。